

医療の世界で 生きる女性たち

大阪府四條畷市／眼科
松山 加耶子さん

異国仕込みのコミュニケーション力を活かし
地元で愛される医院を目指して今日も奮闘中



松山眼科クリニックに入るとすぐにいつも仏像が飾られていた。これがなんとお母さまの手彫り。数か月に一度、作品ができると入れ替えて飾っていくのだとか。そのお母さまに励まされて医師になった松山さん。アジア辺境の患者を救ってきた熱意を大阪の人びとのために発揮し続けている。
【文／プレシオ編集部 写真／西川菜摘】

◆今回お話を伺ったのは、松山加耶子さん。お昼休憩中に取材に応じてくださった。高校時代に目標が見つからずにいると「何もないならお医者さんになったら」と眼科医の母からいわれ、医学部に入るうと決意。だが、「いばらの道でした」と笑って話す。高校2年生で受けた全国模試の結果は下から数えたほうが早く、このままではいけないと一念発起。学校から帰宅し18時まで一日学んだ授業を復習して就寝、3時に起きて登校までにさらに総復習という変則的猛勉強の末、医学部に合格した。以後、さまざまな経験を積み、関西医科大学総合医療センターでは医長を務め、大阪府北東部の緑豊かな街、四條畷市で松山眼科クリニックを開院した。

勤務医時代から、年に2回、ネパールでの国際医療にも携わってきた。辺境の村を目指し、交通手段がなければ徒歩で片道3日かけて向かうこともあった。ネパール人医師と共に3日間滞在し、およそ千人、多いときには二千人の村人の診察をした。情報網はおろかライフラインも整っていない中で、ロコミを聞き遠方から数日かけてやってくる患者も少なくなかったという。白内障などの手術では照明一つでも苦労した。手動バッテリーで電気を起こし、それで駄目なら懐中電灯で照らした。3日間でも多いときには270人に執刀したという。2児の母となった現在では、ネパールには他の方が赴いてくれている。日本で陰ながら応援しつつ、いまは地元の人びとのために奮闘している。海外で培ったコミュニケーション力を活かし、愛される医院を目指している。